

天津水西莊における杭州詩人

市瀬信子

はじめに

清代乾隆初期、各地で詩会による唱和が盛んになった。とりわけ地方都市においては、富商が主催する詩社における詩会が盛んであった。その中で、袁枚が記した富商による詩会隆盛の地方都市は、揚州、天津、杭州である。

昇平日久、海内殷富、商人士大夫慕古人顧阿瑛、徐良夫之風、蓄積書史、広開壇坫。揚州有馬氏秋玉之玲瓏山館、天津有查氏心穀之水西莊、杭州有趙氏公千之小山堂、吳氏尺蠖之瓶花齋。名流宴咏、殆無虛日。

『隨園詩話』卷二十六〇

昇平日久くして、海内殷富、商人士大夫 古人顧阿瑛、徐良夫の風を慕ひ、書史を蓄積し、広く壇坫を開く。揚州に馬氏秋玉の玲瓏山館有り、天津に查氏心穀の水西莊有り、杭州に趙氏公千の小山堂、吳氏尺蠖の瓶花齋有り。名流宴咏し、殆ど虚日無し。

これは清代乾隆年間初期に各地で盛んになった、商人

による詩会活動の拠点を挙げたものである。これらの商人が慕ったという顧阿瑛、徐良夫とは、いずれも元末から明初にかけての富商で、私財を投じて四方から広く賓客を集め、詩会を開き、更に詩会での唱和を詩集として編んで刊行している。特に顧阿瑛の玉山草堂は、文人雅集の場として有名であり、『草堂雅集』等の唱和集が当時の様子を伝えている。

それに比される揚州の馬曰琯の小玲瓏山館、天津の查為仁の水西莊、杭州の趙昱の小山堂、吳焯の瓶花齋も、いずれも商人が築いた園林であり、当時盛んに詩会が開催された。

ところで、揚州、天津、杭州の三地域のうち、揚州、杭州は江南の地にあり、古くから長く多様な文学の歴史を持つ。一方天津の地は、文学史上にその名を残してきた地域とは言えない。明代永樂年間頃から北京への經由地として発展したものの、都市としての歴史も浅く、とりわけ、詩人が集って詩会を開くという文化はなかったといつてよい。それが乾隆初期には、四方の文人が集まる詩壇の地として歴史に登場することになる。

その背景に水西荘を基盤とする詩壇の主催者、査為仁ら塩商の経済力があるのは、袁枚の記述にある通りである。しかし富裕な商人であれば誰でも文化の基地を築けるというものではない。揚州詩壇の隆盛を支えた馬曰琯、馬曰璐兄弟の小玲瓏山館は、豊富な蔵書、優れた文化事業、盛んに開かれた詩会などで広く知られているが、それは馬氏の元集った多くの優れた文人墨客たちによるところが大きい。

天津に目を転じてみれば、やはり査氏の水西荘に集った客人たちがその文化を支えたといえる。そして客人の中には、浙江とくに杭州の詩人が多く含まれていた。袁枚の隨園詩話の記述は、詩壇の主催者たる商人に視点を置いた記述のように見えるが、実は杭州、揚州、天津いずれの地においても活躍したのは、客人として各地に滞在した杭州詩人であり、これは杭州詩人の遊歴の記録とも言えるのである。

そこで本稿では、客人となつた杭州詩人に注目し、唱酬を中心とする彼らの活動から、水西荘というものを新たに見なおしてみたい。また杭州詩人がいかなる経緯で天津水西荘に赴くことになったのか、なぜ天津水西荘が杭州詩人を必要としたのかについて考察し、清代乾隆期に杭州詩人が地方都市を遊歴した現象の背景に迫ってみたい。

一、天津の文学風土と水西荘

そもそも水西荘以前の、天津における文学の状況とはどのようなものであつたのか。水西荘についての数々の論考を残している劉尚恒氏が「天津査氏水西荘考」に引用する、清初の天津の人、王又樸の記述が、その特徴を最もよくとらえている。

余郷雖密邇京師、然于明成祖始建、蓋軍衛地也。
……東南百里之近即海、四方客之逐魚塩者趨如鶩。
以故好學能文之士、數百年卒無間焉。

（王又樸『詩礼堂雜纂』「詩礼堂古文序」）
余が郷 京師に密邇たりと雖も、然れども明の成祖の始めて建つるに于いては、蓋し軍衛の地なりしならん。……東南百里の近きは海に即き、四方の客の魚塩を逐ふ者趨ること驚の如し。故を以て好學能文の士、數百年卒に聞くこと無し。

「驚」は、追い求めて急ぐことの喩え。つまり天津は北京に近いものの、明の永樂年間に軍衛の地として建設されたのであって、海にまつわる産業のみが発達し、文学や学問の地ではなかったというのである。これが清初の天津の状況である。

また杭州の杭世駿が、同郷の詩人汪沆の「津門雜事詩」に寄せた序には、汪沆が訪れた当時の天津の詩壇と水西荘の様子が描かれている。

雅道之壇坫仍榛狂而末有所闢、吾友汪君西顥滯淫是邦、載離寒暑。……有水西查氏、以恣其游息、而酬唱不孤。

（杭世駿「津門雜事詩序」）

雅道の壇坫仍お榛狂にして未だ闢く所有らざるに、吾が友汪君西顥 是の邦に滯淫し、載ち寒暑を離。……水西の查氏有り、以て其の游息を恣にして、酬唱孤ならず。

「榛狂」は、未開であることの形容。詩に關しては未開の地であつた天津の地に、汪沆は長期間留まつていた。水西查氏とあるのは、查為仁、查学礼ら兄弟のことで、汪沆は乾隆元年、北京での博学鴻試の選に漏れた後、天津の水西莊を訪れ、そのまま乾隆四年まで滯在し、日々唱酬を楽しんだ。孤ならず、とあるのは、水西莊に多くの詩人が集つていたことを示す。

水西莊が築かれたのは、雍正元年であるが、実際には汪沆らを客人に迎えた乾隆元年（一七三六）から、查為仁が世を去る乾隆十四（一七四九）年までが水西莊の最盛期であつた。最盛期の水西莊の様子は、次のように描かれる。

宛平查氏兄弟三人、長為仁、字心穀、康熙辛卯舉人、工詩詞。撰蔗塘詩集□卷、外集□卷、蓮坡詩話三卷、与厲太鴻徵君鶚同註絕妙好詞箋七卷。次為義、字履方、安徽太平府通判、工詩詞。次為礼、字恂叔、以貲郎官

至湖南巡撫、工詩詞。撰銅鼓書堂遺稿三十二卷、內詩廿四卷、詩余三卷、文四卷、詞話一卷。……查氏世居京師、以業塩致富、置別業於天津、名水西莊。交納四方名彦、賓至如歸、樽酒唱和無虛日、与江都馬曰璐、曰琯兄弟小玲瓏山館南北相輝映。時当承平、不特士大夫喜讀書研詩文、即塩商亦篤好風雅、能自樹立如此、洵國朝之盛事、古今之佳話也。

（『長楚齋隨筆』卷九「查為仁兄弟三人撰述」）

宛平查氏兄弟三人、長は為仁、字は心穀、康熙辛卯の舉人にして、詩詞に工。蔗塘詩集□卷、外集□卷、蓮坡詩話三卷を撰し、厲太鴻徵君鶚と共に絶妙好詞箋七卷に註す。次は為義、字は履方、安徽太平府通判にして、詩詞に工。次は為礼、字は恂叔、貲郎官を以て湖南巡撫に至り、詩詞に工。銅鼓書堂遺稿三十二卷、内詩廿四卷、詩余三卷、文四卷、詞話一卷を撰す。……查氏世よ京師に居り、塩を業とするを以て富を致し、別業を天津に置き、水西莊と名づく。四方の名彦と交納し、賓の至ること帰するが如く、樽酒唱和して虚日無く、江都の馬曰璐、曰琯兄弟の小玲瓏山館と南北相輝映す。時承平に当たり、特に士大夫の讀書を喜び詩文を研ぐのみならず、即ち塩商も亦た篤く風雅を好み、能く自ら樹立すること此の如し、洵に國朝の盛事、古今の佳話なり。

ここには查氏三兄弟の事跡とともに、查氏の水西莊が

四方の名士を集めて連日唱和を行い、揚州の馬氏の園林小玲瓏山館と並び称された様子が記されている。文学不毛の地とされた天津が、「江都の馬曰璐、曰琯兄弟の小玲瓏山館と南北相輝映す」と、文学の長い伝統を持つ江南の地と並び称されたことは、天津の歴史にとつて画期的な出来事であつた。また財産はあつても教養はないと蔑視されがちであつた塩商が、知的な文化人として地方都市のリーダーとなつたことも「国朝の盛事」「古今の佳話」と称えられるべきことであつた。

ここで、水西荘の最盛期を築いた查氏兄弟について触れておく。查為仁は、一名は成蘇、字は心穀、蓮坡と号した。宛平つまり北京の人であるが、本籍は海寧、つまり杭州である。康熙三十三年に生まれ、乾隆十四年に没した。康熙五十年に、順天鄉試第一位合格という華々しい成績を上げたのであるが、その時に不正入試に荷担したという罪名を着せられ、父の查日乾とともに投獄される。結局查為仁は八年間を獄中で過ごした。出獄したのが康熙五十七年、二十五歳の時である。それ以降科挙への望みを絶たれ、自らのための学問に打ち込んだ。雍正元年、二十八歳の時に父によつて水西荘が築かれると、以後水西荘に移り住み、莫大な書籍を貯え、詩会を主催、水西荘を訪れた多くの名士と唱酬を行つた。『蔗塘未定稿』『蓮坡詩話』などで知られるが、著作については後に改めて述べる。次男の查為義は詩に工ではあつたが唱酬に熱意をもつて加わることはなく、詩文集などもない。三

男の查学礼は、原名を為礼、又の名を礼といい、字は恂叔、一の字を魯存といい、儉堂と号した。查為仁と共に水西荘の唱酬に加わつた。查学礼には『銅鼓書堂遺稿』があり、水西荘での唱酬を多く記録している。

二人の内、水西荘の主役となつたのは、やはり查為仁である。希望に満ちたはずの青春の出発点での投獄、科挙の資格喪失という転落を経験した後、水西荘という場を得て、多くの名士と交流し、自分自身も名士として文学史上に名を残すこととなつた。

查為仁、字心穀、宛平人。康熙五十三年舉人、有蔗塘未定稿。……蓮坡先生早賦鹿鳴、被讎得罪數年、而後得積、因發憤讀書、博通典故。所居天津水西莊、貯書萬卷、南北往來名士、如万柘坡、厲樊榭、趙飲谷等、無不攬環結佩延主其家、相与研詩詞書画。

《湖海詩伝》卷十三

查為仁、字は心穀、宛平の人。康熙五十三年の舉人にして、蔗塘未定稿有り。……蓮坡先生早に鹿鳴を賦すも、讎かれて罪を得ること數年、而る後積かるを得、因りて發憤讀書し、典故に博通す。居る所の天津水西莊、書を貯ふること萬卷、南北往來の名士は、万柘坡、厲樊榭、趙飲谷等の如く、攬環結佩して延かれて其の家に主らざるは無く、相与に詩詞書画を研ぐ。

水西莊で、査為仁は万巻の書籍を蔵し、多くの名士を招いて滞在させ、彼らと交流し、主客ともに詩詞書画を研鑽する日々を過ごすようになったという。ここで客人として挙げられる名士は、秀水の万光泰、杭州の厲鶚、蘇州の趙虹である。このうち、万光泰と厲鶚はいずれも浙江の人である。客人の中に浙江の客人が多かった事については、客人の一人であつた厲鶚が「負郭有水西莊、……主其家者、多浙中名勝（負郭に水西莊有り、……、其の家に主る者、多くは浙中の名勝なり）。」（厲鶚『沾上題襟集』序）と記している。厲鶚もまた浙江杭州の人である。この時代に揚州及び天津の詩社に身を寄せた詩人達は、多くが浙江の人であり、特に杭州詩人の比率が高かつた。

同時期の揚州の詩社の客人について、次のようにある。

揚州塩商所萃、喜招名士以自重。……而浙人尤多、如全祖望、陳楞山撰、厲太鴻鶚、金壽門農、陶篁村元操及授衣、弟江阜、尤以領袖稱。

〔湖海詩伝〕卷六 陳章

揚州は塩商の萃まる所にして、名士を招いて以て自から重んずるを喜ぶ。……而して浙人尤も多く、全祖望、陳楞山撰、厲太鴻鶚、金壽門農、陶篁村元操及び授衣、弟江阜の如きは、尤も領袖を以て称せらる。

揚州の塩商に喜んで招かれた名士は、全祖望、陳撰（楞山）、厲鶚（太鴻）、金農（壽門）、陶元藻（篁村）、陳章（授衣）、陳阜（江阜）である。このうち陳撰、厲鶚、金農、陳章、陳阜は杭州の人であるが、全祖望も寧波の出身ながら、十八歳から杭州で厲鶚らと共に数年を過ごし、杭州詩壇にも参加している。又、陶元藻も会稽の人であるが、帰郷後は西湖に別荘を築いて過ごしていたため、彼らも杭州詩壇の詩人といつてよい。つまりここに挙げられている浙人は、皆杭州詩壇の詩人なのである。

水西莊はというと、「浙中名勝」が多いと厲鶚が言うとおり、客人に浙人が多いが、とくに杭州人の活躍が目立つ。そこで以下に、水西莊をその客人、とくに杭州詩人について見てみることにする。

二、水西莊の詩人達

（一）『沾上題襟集』の詩人

水西莊での詩会の記録となる唱和集に『沾上題襟集』がある。これは乾隆元年から五年にかけて、水西莊の同人八名の詩を集めて収録したものである。厲鶚は、その序で次のように述べている。

津門為直沽入海処、自元明以來、地近畿南、運舟官舫、從之取道。詞客經由者、率多羈旅閔歎、所謂勞者之歌。求其遊集宴衍、賦詩言志、如顧阿瑛玉山雅集、

徐良夫耕漁軒集等、不特自作者不可得、即援引前代、亦寥聞無聞、豈非不得其人、無以為之勸哉。查君心穀、魯存昇弟、詩品皆清警拔俗、性復喜賓友、負郭有水西莊、……主其家者、多浙中名勝、山陰則有劉君紫仙、胡君文錫、秀水則有万君循初、吾杭則有吳君中林、陳君江阜、汪生西顥。其詩各張一軍、与主人為勦敵。合數年晨夕往還之作、釐為八卷、目之曰『沽上題襟集』。

(厲鶚「沽上題襟集序」)

津門は直沽の海に入るの処為りて、元明より以來、地は畿南に近く、運舟官舫、之より道を取る。詞客の經由する者、率多は羈旅の悶歎にして、所謂勞者の歌なり。其の遊集宴衍し、詩を賦し志を言ふこと、顧阿瑛の玉山雅集、徐良夫の耕漁軒集等の如きを求むるも、特に自ら作る者、得べからざるのみならず、即ち前代を援引せんとするも、亦た寥聞にして聞くこと無く、豈に其の人を得ずして、以て之が勸を為すこと無きに非ざらんや。查君心穀、魯存昇弟、詩品皆清警拔俗、性復た賓友を喜び、負郭に水西莊有り、……其の家に主る者、多くは浙中の名勝にして、山陰は則ち劉君紫仙、胡君文錫有り、秀水は則ち万君循初有り、吾が杭は則ち吳君中林、陳君江阜、汪生西顥有り。其の詩各おの一軍を張り、主人と勦敵と為る。數年晨夕往還の作を合し、釐めて八卷と為し、之を目して『沽上題襟集』と曰ふ。

元明以來、天津は交通の要所となった。しかし、通過する詩人達は、旅の途中の嘆き、苦勞を歌うばかりであつて、顧阿瑛、徐良夫ら商人が詩会での詩をまとめた唱和集のように、集まつて詩会を開き、詩を作つて思いを詠ずるというものではなかった。今の作者がいけないのみならず、それ以前に人物を求めようにも、ほとんど見当たらない。まずは始めるべき人がいなくてはならない、という状態にあつた。厲鶚『樊榭山房集』卷二に収録される「沽上題襟集序」では、「無以為之」の箇所には、「無地主以為之勸」と、「地主」の二文字を加えており、地域の詩壇を主催する先驅者がいなかったことを言っていることがわかる。そこに現れたのが、查為仁、查学礼兄弟である。また客人については主として浙江の名士だつたという。そのうち劉文煊、胡容烈、万光泰、吳廷華、陳阜、汪沆と、水西莊の主である查為仁と查学礼を加えて八名の詩をまとめて八巻としたのが『沽上題襟集』である。以下に八名の詩人達について、出身と水西莊に滞在した時期などについて簡単に紹介しておく。順序については、『沽上題襟集』の巻の順とする。

【劉文煊】字は紫仙、雪柯と号し、山陰の人である。乾隆元年の博学鴻試に推挙された。その後天津に住んだため、水西莊での唱和が多い。画家として名がある。

【吳廷華】字は中林、東壁と号した。杭州仁和の人である。康熙三十五年の舉人。内閣中書から福州府海防同知となり、乾隆二年に天津の水西莊に来て、府尹程鳳文、県令

朱奎揚に求められ、同郷の汪沆とともに『天津府志』『天津県志』を編纂し、乾隆四年に完成させた。同年、徴に応じて北京の三札館に赴く。後、乾隆十二年ごろ、再び水西荘を訪れて唱和に参加する。

【査為仁】宛平に居住していたが、本籍は海寧、つまり杭州の人である。雍正元年に天津の水西荘に移り住み、各地から名士を客人として招いた。乾隆十四年天津で死去、以後天津の詩壇は衰退したと言われる。

【汪沆】字は西顥（西顯）、又の字は師李といい、槐堂（槐塘）と号した。杭州錢塘の人。乾隆元年に博学鴻試に推挙されて北京に赴き、落選後は天津水西荘に滞在。水西荘を訪れた時期は、査学礼『銅鼓書堂遺稿』卷一丙辰（乾隆元年）に「臘八日偕汪西顥徵君家天來姪飲水西荘之花」と題する詩があるのが、水西荘での汪沆を記す最初の詩であり、やはり乾隆元年だと思われる。水西荘では吳廷華とともに『天津府志』『天津県志』を編纂。「津門雜事詩」を作る。乾隆四年、杭州に帰る。その後も天津、揚州、杭州を行き来した。最も長く水西荘に滞在した客人とされる。

【陳臯】字は江臯、対瀕（対鴈）と号した。杭州錢塘の人。乾隆四年から七年まで水西荘に滞在。その前後に揚州の馬氏小玲瓏山館に兄陳章と滞在し、兄弟ともに名士と称される。乾隆十年に再び水西荘で唱和する。

【万光泰】字は循初、柘坡と号した。浙江、秀水の人。秀水派の詩人として知られる。乾隆元年博学鴻試に推挙

されるが落選、同年挙人となる。以後水西荘で唱和し、乾隆四年に秀水に帰る。五年には再び水西荘で唱和。以後、水西荘を何度か訪れて唱和に参加する。

【胡審烈】字は文錫、吳齋と号した。天津の人。原籍は山陰である。天津に居住し、査氏兄弟と最も長い期間にわたって唱和した。客人というよりも、天津の地元の同志である。

【査学礼】兄の査為仁とともに水西荘に住み、唱酬を続けたが、乾隆十三年に監生より戸部主事と為り、翌十四年には水西荘を離れて広東に赴任した。同年査為仁が死去し、水西荘の詩壇は衰退した。

これらの詩人のうち、水西荘の主人である査氏兄弟と天津の人である胡審烈を除くと、客人は五名。また、劉文煊は乾隆元年以降は天津に居住したと考えられるため、これも客人とは言いがたい。これらの天津在住者を除いた四名、つまり吳廷華、汪沆、陳臯、万光泰が他の土地から水西荘に来た客人である。うち吳廷華、汪沆、陳臯が杭州の人である。つまり、『沽上題襟集』に見える客人は、全て浙江の人である上に、多くが杭州詩人なのである。更に、査氏がもともと杭州籍であったことから考えると、天津の地にあつた水西荘は、杭州の詩人を中心として成立していたといえる。

乾隆元年からの滞在者が多いのは、いずれも乾隆元年の博学鴻試に推挙されて北京を訪れ、多くが落選して、その後水西荘に招かれ滞在することになったためである。

『沽上題襟集』には、主要詩人八名の他、附録として詩を応酬した相手の詩を収録している。

以下に各巻の主要詩人と附録の詩人を羅列する。

卷一 【劉文煊（山陰）】 胡忠楨（山陰）、童琦（山陰）。

卷二 【吳廷華（仁和）】 余尚炳（天津）、趙昱（仁和）、

惲源濬（陽湖）。

卷三 【查為仁（宛平）】 查為義（天津）、王霖（山陰）、

杜甲（江都）、厲鶚（錢塘）。

卷四 【汪沆（錢塘）】 厲鶚（錢塘）、葛正笏（崑山）。

卷五 【陳阜（錢塘）】 陳章（錢塘）、李時馨（保定）、

施安（錢塘）。

卷六 【万光泰（秀水）】 周大樞（山陰）、朱岷（麻城）、

余懋橋（諸暨）、万光謙（秀水）。

卷七 【胡睿烈（天津）】 趙賢（錢塘）、凌洪仁（烏亭）。

卷八 【查学礼（宛平）】 周焯（天津）、杭世駿（仁和）、

張鳳孫（華亭）、李元（山陰）、申甫（江都）。

附録に登場する詩人たちは、直接水西荘で唱和した相手とは限らない。例えば巻五の陳章は、水西荘の客人となった陳阜の兄であるが、当時揚州に居り、天津を訪れたことはない。¹¹ よって、附録は詩壇での詩会の記録と、同席しない状態で詩の交流があつた詩人たちの記録を含めたものとなっている。

附録に見える詩人達は計二十四名。見てわかるように、山陰、仁和、錢塘、秀水など、浙江の人が多い。その中で、杭州詩人は趙昱、厲鶚、陳章、施安、趙賢、杭世駿

である。趙賢は『沽上題襟集』の詩題の中に唱酬の相手としてしばしばその名が見え、汪沆と共に杭州に帰る乾隆四年まで天津に留まり、水西荘の唱和に参加している。施安は『沽上題襟集』巻五陳阜に「答施静巖維揚見懷」と見えており、当時維揚つまり揚州にいたことがわかる。他に陳章、厲鶚も、当時揚州の馬曰瑄、馬曰璐の詩社にいた。つまり、附録に登場する杭州詩人の半数は、揚州にいたのである。更に陳阜は、天津に来る前に兄の陳章とともに揚州に滞在しており、揚州の韓江詩社の一員であつた。このように『沽上題襟集』は、天津詩壇が杭州詩人を通じて揚州詩壇と深く繋がつていたことを示すものでもある。同時に、揚州と天津のいずれの地の詩壇にも同時期に杭州詩人が属していたことがわかる。

『沽上題襟集』が編纂された経緯は、厲鶚の序の他、查学礼の乾隆六年の「沽上題襟集序」に見える。¹² この序から、各詩人の動向と、編纂の経緯とを照合してみる。

予拙于賦詠、尤不善閉戸苦吟、數年以來三五同志晨夕必俱酒坐琴言、各相贈答、而予詩亦遂以多。……庚申冬、同志八人、取在津酬唱之作、每年簡叙數章、各成一卷、名曰沽上題襟集。而此卷一百三首、則予不揣荒學、附于諸君之後也。……乾隆六年夏四月茶垞查学礼自序。

予 賦詠に拙、尤も戸を閉じて苦吟するを善くせず、數年以來三五の同志晨夕必ず俱に酒坐琴言し、

各おの相贈答して、予が詩も亦た遂に以て多し。：
庚申冬、同志八人、津に在りて酬唱するの作を取りて、年毎に数章を簡択し、各おの一巻と成し、名づけて沽上題襟集と曰う。而して此の巻一百三首は、則ち予 荒学を揣らず、諸君の後に附するなり。乾隆六年夏四月茶垞查学礼自ら序す。

これによると、数年来、水西荘の同人が朝晩必ず一緒に酒と音楽をともなつた詩会を開き、詩を唱酬していたという。こうした盛んな詩会での作を詩集にまとめることにしたのが、庚申つまり乾隆五年のことである。八人がそれぞれ年ごとに数首の詩を選んで、一巻とした、とあるから、各人がそれぞれ編年の形で詩を編んだことになる。查学礼の序は乾隆六年の夏に書かれており、冬から始まつた編輯作業は半年以内に終了したと考えられる。一百三首というのは、查学礼一人の収録詩数で、この序にあるとおり、查学礼の詩は詩集の最後に収録されている。

また、編年の『銅鼓書堂遺稿』所収の詩と照らし合わせてみると、查学礼の詩は、乾隆元年から乾隆五年までの作を収録している。詩人ごとに水西荘の滞在期間がずれているが、『沽上題襟集』は、ほぼこの期間の詩を収録していると考えてよいだろう。

ところで、詩集を編むことを決めた乾隆五年前後は、

水西荘の詩人達の移動の時期でもあった。吳廷華は乾隆四年に仕事で北京に戻り、汪沆も同年に杭州に帰っている。逆に陳阜は乾隆四年に水西荘に來たばかりであった。万光泰は乾隆四年に秀水に帰るが、五年に再び水西荘に戻つたようだ。同人がめまぐるしく入れ替わるのを見て、查為仁は水西荘の唱酬と客人の記録を残す必要を感じ、それがこの詩集編纂の直接の動機になつたのではないかと考えられる。

年ごとに数章を選ぶといつても、陳阜の場合は、來たばかりで唱和の期間が短い。よつて、収録された詩も、最初が「書家書後寄授衣先生、并和來時送別韻」と、前年水西荘に移つてきたときに兄からもらつた手紙に答える詩であり、最後が「同人將刻沽上題襟集余苦無詩、又索拙不善作、且留津門未久、所作益少、客有強之者、賦此自嘲兼呈同志」と、詩集の刊行の話を待ちかけられ、せかされて詩の数をそろえるために苦労したことをそのまま詩にしたものとなっている。こうした詩が収録されていることも、『沽上題襟集』の成立の様子を伝えて興味深い。

(二)『沽上題襟集』中の杭州詩人

ここからは『沽上題襟集』の中の杭州詩人を取りあげ、彼らの唱酬に関する事項を、様々な資料から検証する。

【吳廷華】吳廷華は、『札記章句』『札記疑義』などを

著した学者として知られる名士である。詩については經学ほどには評価されていないが、その詩才を水西荘で發揮したとして、次のように記されている。

吳廷華、字中林、号東壁、仁和人。……東壁嘗游津門、時查氏方以風雅号召海内、吾鄉厲樊榭、汪槐堂、陳授衣、对鷗諸名士皆在焉。東壁刻燭聯吟、咸共推服其詩。具見沽上題襟集中。

（吳振棫『国朝杭郡詩輯』卷九「吳廷華」）

吳廷華、字は中林、東壁と号し、仁和の人。……東壁嘗て津門に遊び、時に查氏方に風雅を以て海内に号召し、吾が郷の厲樊榭、汪槐堂、陳授衣、对鷗の諸名士皆これに在り。東壁燭を刻みて聯吟し、共に其の詩を推服す。具に沽上題襟集中に見ゆ。

吳廷華が天津に行った頃、查氏は海内の詩人を広く招き、それに応じて杭州の厲鶚、汪沆、陳章、陳皐の諸名士が水西荘に行った、とある。吳廷華は詩人として聯句にも挑み、周囲もその詩を賞賛したという。詩が沽上題襟集に収められているというのは、彼の詩集が伝わっていないためである。しかし、吳廷華が実は唱酬に熱心であったという資料は他にもある。杭州詩人で、水西荘の名士とも言われた杭世駿が、吳廷華らと共に北京で詩を詠じたことを次のように記している。

谷林応詞科北上、浮沈人海、淹忽三年。……余与勾甬全吉士謝山在詞館、吳通守東壁、以与脩三札留京師、每会合、必有詩。

（杭世駿『道古堂集』卷九「趙谷林愛日堂吟稿序」）

谷林 詞科に應じて北上し、人海に浮沈して、淹忽三年。……余 勾甬全吉士謝山と詞館に在り、吳通守東壁、三札を脩するに与かるを以て京師に留まり、会合する毎に、必ず詩有り。

谷林は杭州の趙昱のこと。杭州の詩社の主催者でもあり、『沽上題襟集』では吳廷華の巻の附録に見える。全吉士謝山は寧波の全祖望のこと。十八歳で杭州に行き、厲鶚、杭世駿、趙昱らと經史の討論、唱和を行っており、杭州詩壇の一員であることは先にも述べた。

全祖望、趙昱、杭世駿はいずれも乾隆元年の博学鴻試のために上京した。趙昱は落選したが、三年ほど北京に留まり、全祖望は博学鴻試ではなく一般の科擧で進士となり、博学鴻試に合格した杭世駿と共に翰林院にいた。この三名が会う度に詩を作ったというのである。全祖望が翰林院散館に伴い、知果となるのを拒み、北京を離れるのが乾隆二年。よってこの唱和は乾隆元年から二年にかけてのことで、吳廷華が天津の水西荘に移る直前である。つまり『沽上題襟集』以前にも、北京で杭州詩人同士で盛んに唱和が行われていたことがわかる。

【汪沆】汪沆の家庭教師は、杭州の著名な詩人、厲鶚である。汪沆の『樊榭山房文集序』に「康熙甲午至戊戌、先生授經予家聽雨樓、兄浦偕沆朝夕承提命」とあり、甲午（康熙五十三年）、厲鶚二十三歳の時から戊戌（康熙五十七年）まで汪沆の家に教師として住み込んでいた。汪沆は厲鶚の薫陶を直接受けた弟子である。汪沆の天津詩壇での活躍については、次のように評されている。

汪沆、字西顥、号槐塘。錢塘諸生。早歲能詩、為學博涉無津涯、与王会祥、杭世駿、符之恒、張、称松里五子、分修浙江通志及西湖志。举博学鴻詞、廷試額溢報罷、遊天津客查氏水西莊、南北論詩者、奉為壇坫。

『乾隆杭州府志』卷九十四

汪沆、字は西顥、槐塘と号す。錢塘の諸生。早歲詩を能くし、學を為しては博涉にして津涯無く、王会祥、杭世駿、符之恒、張・と松里五子と称し、浙江通志及び西湖志を分修す。博学鴻詞に挙げられ、廷試額溢ちて報罷み、天津に遊び查氏の水西莊に客たるに、南北の詩を論ずる者、奉じて壇坫と為す。

汪沆は、若くして詩才を発揮し、學問においても博学であつたという。同郷の仲間と地方誌を編纂しているといふことから、杭州での同人達は、詩のみならず史學など多方面に渡る知識を備えて活躍していたことがわかる。乾隆元年に博学鴻試のために北京を訪れ、その帰途、

天津の水西莊に滞在することになると、天津詩壇は全国的な人氣を得るようになったという。汪沆が詩人として広く名を知られる存在だったことがわかる。汪沆は天津で『津門雜事詩』を撰するのであるが、それについては後に詳しく述べる。

【陳阜】『沽上題襟集』の詩人の中で、当時唱酬において最も人氣があつたのは、おそらくこの陳阜であろう。

対瀕……貧不能家食、遠走津門、主于斯堂查氏、從吳通守東壁研究三札、粹然一經儒也。時查氏兄弟方緝題襟之集、對瀕矯尾厲角、名噪京西。倦遊歸広陵、主玉山堂馬氏、与賢兄竹町闌入韓江雅集。……広陵社事繁興、程翰林午橋、張主事漁川、汪員外對琴、江藩伯鶴亭、開設壇坫、争以得對瀕兄弟為勝。

（杭世駿『道古堂文集』卷十一「吾尽吾意齋詩序」）

對瀕……貧しくして家食する能はず、遠く津門に走り、于斯堂查氏に主り、吳通守東壁に従つて三札を研究し、粹然として一經儒たり。時に查氏兄弟方に題襟の集を緝し、對瀕は矯尾厲角、名は京西に噪がる。倦遊して広陵に歸り、玉山堂馬氏に主り、賢兄竹町と韓江雅集に闌入す。……広陵社事繁興にして、程翰林午橋、張主事漁川、汪員外對琴、江藩伯鶴亭、壇坫を開設し、争ひて對瀕兄弟を得るを以て勝れりと為す。

陳阜は貧しく、家に居ては食べていけなかったため、天津に行き査氏の水西荘に身を寄せ、同郷の学者である呉廷華から經字を学んだという。唱酬以外に、客人同士の間にもこのような知的交流があることから、水西荘が知識人を育てる場ともなっていたことがわかる。水西荘で詩を磨き、陳阜の詩名はいよいよ高くなる。やがて天津を離れて揚州に行き、塩商の馬曰琯の詩社に帰り、かねてから揚州にいた兄の陳章とともに韓江雅集に参加する。そのころ揚州では、塩商が盛んに詩会を開いたが、みな陳章、陳阜兄弟を詩会に迎えようと争ったという。陳兄弟の人氣がどれほどのものであったかがよくわかる。

ともに水西荘で数年間を過ごした汪沆は、陳阜が水西荘に來た理由を詳しく述べている。

君甫壯即隨兄章、同館揚州馬氏玉山堂。嶸谷、半查兩君、広儲載籍、挿架十萬卷、君得以恣其漁獵、見聞日富。且從兄章學詩學書業大進、聲華雨集。時人有陳氏二難之目。先是戊午間、陳榕門觀察聘予纂天津郡邑二志、得交查心穀、魯存、臯季。心穀、飢君名。屬予貽書招之北行。同主查氏水西莊、對屋而居、數晨夕者五年。天津為畿南一大都會、舟車往來輻輳、名流翕集、花天月地、合樂伝觴、必授簡賦詩、君則操筆立就、四座伝觀、莫不嘆絶。……兄章年近六十遂僦居於揚、与兄章相依、杜門不復出、時邗江諸詩老、亦結有行菴、讓圃諸詩社、君偕兄聯轡而入、更唱迭和、詩格益高潔

莫攀。今沽上題襟、韓江雅集二集中所載君詩、洵皆卓然可伝也。

『槐塘文稿』卷三「陳太学家伝」

君甫め壮たりしに即ち兄章に随ひ、同に揚州馬氏玉山堂に館す。嶸谷、半查兩君、広く載籍を儲え、架に挿すこと十萬卷、君其の漁獵を恣にするを以て、見聞日に富むことを特。且つ兄章に従いて詩を學び書を學びて業大いに進み、聲華雨集す。時人に陳氏二難の目有り。是れより先戊午の間、陳榕門觀察予を聘して天津郡邑二志を纂せしめ、查心穀、魯存、臯季と交はるを得。心穀君の名に飢き、予に属して書を貽りて之を招きて北行せしむ。同に查氏水西荘に主り、對屋して居り、晨夕を數ふること五年。天津は畿南の一大都會為りて、舟車往來輻輳し、名流翕集し、花天月地、合樂伝觴し、必ず授簡して詩を賦すに、君は則ち筆を揺して立ちどころに就き、四座伝觀して嘆絶せざるは莫し。……兄章年六十に近くして遂に揚に僦居し、兄章と相依り、門を杜ちて復た出でず。時に邗江の諸詩老も亦た結ぶに行菴、讓圃諸詩社有り、君は兄と偕に聯轡して入り、更にも唱ひ迭ひに和し、詩格益ます高潔にして攀づる莫し。今沽上題襟、韓江雅集二集中に載する所の君の詩、洵に皆卓然として伝ふべきなり。

先に陳阜は貧しさから家を出て天津に行った、という

文をみたが、この伝記からは、それだけではなく、彼の名声を請われて招かれたという面もあることがわかる。

陳臯は若い頃、兄の陳章とともに揚州の馬氏の元に行き、そこで馬氏兄弟の豊富な蔵書を利用して学識を身につけ、兄に学ぶことで更に名声を高めた。当時陳氏二難、つまり優劣つけがたい優れた兄弟として名を馳せたという。その後乾隆三年、汪沆が天津地方誌の編纂のために招聘されて水西荘にいた時に、査為仁は陳臯の名声を嫌と言うほど耳にし、ついに汪沆を通じて手紙を送り、水西荘に招いたというから、水西荘にはやはり名士として招かれたのであろう。天津には大勢の名流が訪れて詩会が開かれ、詩を作ることになる。そういう時陳臯は即座に詩を詠じ、その作品は回し読みされて四座を感嘆させたという。やがて揚州の兄陳章のもとに行き、揚州の詩社で唱和し、詩格は益々高潔になったという。天津の沽上題襟集、揚州の韓江雅集の二つの唱和集の中にある陳臯の詩は、抜きん出た傑作である、と評されている。

このように、陳臯は兄とともに各地の詩社で求められる名士だったのである。吳廷華、汪沆にしても、やはり著名人であり、水西荘はこうした杭州の名士が集まることで、詩壇としての格を上げていったと考えられる。

(三) 水西荘における、その他の杭州詩人

『沽上題襟集』は乾隆四年に編纂が企画されるが、名士と言われる人物でも、その時期に水西荘に滞在していなければ、主要詩人として収録されない。そこで以下に

『沽上題襟集』の時期以外に滞在した杭州の名士を挙げておく。

【符曾】字は幼魯、葑林と号した。雍正元年、杭州で詩社の同人沈嘉轍、吳焯、陳芝光、趙昱、厲鶚、趙信と共に『南宋雜事詩』を作り、その名を知られる。乾隆元年に博学鴻試に推薦されて北京に赴き、その後水西荘に居住。汪沆らとともに水西荘に滞在した。翌乾隆二年に杭州に帰る。査学礼『銅鼓書堂遺稿』に唱和詩が収録されているが、帰郷した時期が早かったため、『沽上題襟集』には入らなかった。乾隆二年、査為仁の『抱甕集』に序を寄せている。乾隆十四年、査学礼は広東に赴任する折に杭州に立ち寄り、符曾と会って唱和している。¹⁰⁾

【厲鶚】字は太鴻、樊榭と号した。康熙五十九年の挙人で、乾隆元年に博学鴻試に落選した後、科挙の道を断つ。揚州馬曰琯の小玲瓏山館を拠点に、『宋詩紀事』他の著作に励み、また各地の詩会の領袖と目された。

厲鶚は査為仁と文学を通じて長く交流があったことがわかっているが、『沽上題襟集』編纂時の乾隆五年には、まだ水西荘を訪れたことがなかった。

僕三游長安皆有事、輪蹄未嘗一至水西与分劇韻。

(厲鶚「沽上題襟集序」)

僕三たび長安に遊ぶも皆事有り、輪蹄未だ嘗て一たびも水西に至りて劇韻を分かつて与からず。

訪問してはいないとはいえ、『沽上題襟集』では、査為仁と汪沆の附録の二箇所に名が見えている。また査為仁の詩に乾隆五年に厲鶚から送られた「移居詩」に和韻した詩があり、早くから査為仁と親しく交流していたことがわかる。厲鶚が実際に水西荘に立ち寄ったのは乾隆十三年であつた。

厲鶚……以孝廉需次県令、將入京、道經天津、查蓮坡先生留之水西莊、觴詠數月、同撰周密絕妙好詞箋、遂不就選而歸。
（『湖海詩伝』卷二）

厲鶚……孝廉を以て次を県令に需^{もと}ち、將に京に入らんとするに、道に天津を経、查蓮坡先生 之を水西荘に留めて、觴詠すること數月、同に周密の絶妙好詞の箋を撰し、遂に選に就かずして歸る。

求職活動のために北京に向かう途中、水西荘を通過したところ、査為仁に引き留められ、數ヶ月間にわたつて「觴詠」し、ともに絶妙好詞箋を撰して、その後北京での求職活動をやめて歸つてしまつたとある。この時のことについて、厲鶚の友人である杭世駿は、「買舟一至津門、留連三月而返（舟を買いて一たび津門に至るや、留連すること三月にして返る）。」（『道古堂集』卷十七「厲母何孺人寿序」）と、滞在期間が三ヶ月であつたことを記している。二人が『絶妙好詞箋』を水西荘で撰した事実はよく知られているが、「觴詠」とあるように、唱酬もまた連

日行われていた。それは厲鶚が、当時各地の詩壇において、領袖と目されていた人物だつたからである。

大江南北、所至多争設壇坫、皆以先生為主盟、一時往来通縞紵聯車笠。韓江之雅集、沽上之題襟、雖合群雅之長、而總持風雅、實先生為之倡率也。

（汪沆「樊榭山房文集序」）

大江の南北、至る所多く争ひて壇坫を設け、皆先生を以て主盟と為し、一時の往来 縞紵を通じ車笠を聯ぬ。韓江の雅集、沽上の題襟、群雅の長を合すと雖も、風雅を總持するは、實は先生之が倡率を為すなり。

詩社が多く作られたこの時代に、いずれの詩会でも厲鶚を指導者役にすることで、大勢の人を集めたという。揚州の韓江雅集、天津の沽上題襟などの大きな詩壇での優れた詩人達を合わせたとしても、詩文においてリーダー役は、實は厲鶚であつたという。この著名な詩人の來訪を待ち続け、ようやく迎えることのできた査為仁は、短い期間にも関わらず、厲鶚と意気投合し、唱酬を楽しんだ。

宛平查蓮坡為仁、天津鮐商也、以詩名。築水西莊、浜運河、有南碕草堂、数帆台、攬翠軒、枕谿廊、水琴山面堂諸勝。時与諸名士酬其中、尤与厲太鴻善、題詠

尤多。

（李調元『雨村詩話』卷八）

宛平の查蓮坡為仁は、天津の鹺商なりて、詩を以て名あり。水西莊を築くに、運河に浜し、南碕草堂、數帆台、攬翠軒、枕谿廊、水琴山画堂の諸勝有り。時に諸名士と其の中に酬し、尤も厲太鴻と善く、題詠尤も多し。

ここには水西莊で唱酬した詩人達の中で、とりわけ查為仁と仲が良く、題詠が多かったのは厲鶚だったとある。三ヶ月の滞在における唱酬がいかに充実したものだったかがうかがえる。しかし、乾隆十四年に『絶妙好詞箋』が完成し、厲鶚が水西莊を離れて揚州に移ってまもなく、查為仁が病死したとの報が厲鶚の元に届く。『樊榭山房続集』卷七「哭查蓮坡」には、「燕南耆旧久相推、面会して俄に成す万古の哀。（燕南の耆旧久しく相推し、面を会して俄に成す万古の哀しみ。）」とあり、長年会わないままに互いに尊敬しあい、やっと会うことがかない、つかの間の友情を温めたかと思った途端、たちまちの内にその友人を失うことになったことを嘆いている。

【杭世駿】字は大宗、蕪浦と号した。雍正二年の舉人で、乾隆元年博学鴻試に推挙され、翰林院編修を授けられた。武英殿『十三經』『二十四史』の校勘、『三礼義疏』の纂修等で知られるが、詩名も高かった。

仁和杭太史大宗世駿、乾隆丙辰召試、詩為浙江一巨

擘。

（『雨村詩話』卷六）

仁和の杭太史大宗世駿、乾隆丙辰 試に召され、詩は浙江の一巨擘と為す。

浙江は最も詩作が盛んで多くの優れた詩人を輩出した地といつてよい。その中でも、杭世駿の詩はぬきんでいたとの評価を得ているのである。

水西莊に長く滞在したことはないようだが、直言がもとで乾隆八年に罷免されて、杭州に帰る途中、水西莊に立ち寄って唱和に参加している。水西莊での唱和は多くないが、北京時代に查氏が汪沆とともに北京を訪れたという記録がある。⁵⁵ このように、天津と北京という近い距離を利用して、行き来はあったようだ。よって杭世駿は水西莊に滞在した時間は短いのだが、しばしば水西莊を代表する客人として名が挙がる。

查氏自蓮坡老人築水西莊館、客一時有万循初、汪槐堂、陳香泉、高南村、杭大宗、齊次風、朱導江、陳蘭雪、陳石汀、周月東、僧高雲諸名輩、递主齊盟。

（梅成棟『津門詩鈔』『津門詩鈔弁詞』）

查氏 蓮坡老人の水西莊館を築きてより、客には一時万循初、汪槐堂、陳香泉、高南村、杭大宗、齊次風、朱導江、陳蘭雪、陳石汀、周月東、僧高雲の諸名輩有り、递いに齊盟を主る。

この他、王昶『春融堂集』巻九「望水西莊追悼查心穀先生為仁」四首 其四の「青灯留客住」句の原注には「謂杭大宗、厲太鴻、趙飲谷諸君」とあり、滞在した主要な客人の列に加えられている。

杭世駿は水西莊での刊刻に序を求められることも多く、又查為仁の父のために「查日乾墓志銘」を撰している。水西莊での滞在が短く、唱和が少なくとも、このように重要な賓客として名を記されているのは、彼の名声による所も大きいだろう。

(四) 水西莊における客人の意義

これまで見たように、外の世界から多くの名士を招き入れた水西莊であるが、なぜ多くの客人を招いたのだろうか。それには幾つかの理由が考えられる。

まず名士と言われる客人を詩社に入れることで、詩社の名を挙げるためである。水西莊等の詩社に招かれる客人には名士が多く、実際彼らが水西莊で唱和すること、水西莊の詩社としての知名度は高くなっていた。「客查氏水西莊、南北論詩者、奉為壇坫。(水西莊に客たりて、南北の詩を論ずる者、奉じて壇坫と為す。)」(『乾隆杭州府志』巻九十四)は、汪沆が水西莊にいた時の状況を記すものであるが、水西莊に汪沆がいることで、水西莊の詩社が広く注目を集めることになったという。また陳章、陳臯兄弟が揚州の詩社で人気を集めたことを記した次の文章は、客人として誰を招くかが詩社の名声に関わる大きな問題であったことを伝えている。

広陵社事繁興、程翰林午橋、張主事漁川、汪員外對琴、江藩伯鶴亭、開設壇坫、爭以得對瀕兄弟為勝。

(杭世駿『道古堂集文集』巻十一「吾尽吾意齋詩序」)

広陵 社事繁興にして、程翰林午橋、張主事漁川、汪員外對琴、江藩伯鶴亭、壇坫を開設し、争ひて對瀕兄弟を得るを以て勝と為す。

揚州では陳兄弟を詩社に招くことが、優れた詩社との評価となったというのである。天津のように、もともと文人の少なかつた土地にとつては、揚州で人気を得ている陳臯のような著名な詩人達の到来は、詩壇の名を一気に高める要素となつたと考えられる。名士を置くことで、天津詩壇の名が知られ、更に他の名士を招くことが可能になる。こうして文学不毛の地にあつた水西莊は詩人参集の地として知名度を高めることができたのである。

また、優れた詩人を招くことで、詩社同人の詩が上達し、詩社の質を向上させるという効果があつたと考えられる。

予拙于賦詠、尤不善閉戸苦吟。数年以来三五同志晨夕必俱酒坐琴言、各相贈答、而予詩亦遂以多。

(査学礼「沾上題襟集序」)

予 賦詠に拙く、尤も戸を閉じて苦吟するを善くせず。数年以来三五の同志晨夕必ず俱に酒坐琴言し、

各おの相贈答して、予の詩も亦た遂に以て多し。

これは査学礼の文であるが、「賦詠に拙」はもちろん謙遜としても、詩社の同志が毎日一緒に詩を作るとなれば、作詩数も増え、詩も上達するであろう。また査為仁についても、詩人達との交流により、詩が洗練されたと評されている。

蓋為仁嘗学詩於初白菴主、又与厲鶚、杭世駿、万光泰、汪沆諸人游、一洗粗獷浮廓之習、帰諸雅正。

『光緒重修天津府志』卷四十三 査為仁

蓋し為仁嘗て詩を初白菴主に学び、又厲鶚、杭世駿、万光泰、汪沆諸人と遊び、粗獷浮廓の習を一洗し、諸を雅正に帰せしならん。

初白は、査慎行のこと。査為仁の伯父にあたる。清代を代表する詩人の一人である。その査慎行や、厲鶚、杭世駿、万光泰、汪沆らの水西荘の客人らと交流することで、査為仁の詩が洗練され、雅正なるものになったという。なんとも贅沢な環境で詩を修練したのである。査為仁のみならず、詩社に参加した詩人達は、同じ場でこのように互いに刺激しあい、学び合うことになった。詩社は優れた詩人を招くことで、直接詩を学ぶことができる学習の場となったのである。

三、杭州人の水西荘寄寓の背景

ところで、杭州詩人に目を転じてみると、なぜ多くの杭州人が地方の詩社に集まったのかという疑問がわく。杭州人は同時に揚州の韓江雅集にも身を寄せている。天津、杭州、揚州を往来したこれら杭州人の遊歴の背景にあったものについて考察する。

(一) 貧困

水西荘を訪れた多くの詩人たちは、無官の状態で貧困に苦しんでいた。『沽上題襟集』の附録に収録されている紹興の余尚炳について、同じ浙江の汪沆は次のように記している。

同里余子月樵、質敏而勤学、以貧故負米京師、既而僑居津門。
『槐塘文稿』卷二「問畬集序」¹⁶⁾

同里の余子月樵、質敏にして勤学、貧の故を以て京師に負米し、既にして津門に僑居す。

余尚炳は、貧困のために北京に職を求めて出て、やがて天津水西荘に寄寓したというのである。水西荘の同人であつた陳阜も、名声を以て招かれたのではあるが、貧困ゆえに遠く水西荘に来ざるを得なかったという面もある。

対瀕……貧不能家食、遠走津門、主于斯堂査氏。

（杭世駿『道古堂集文集』卷十一「吾尽吾意齋詩序」）

對瀕……貧しくして家食する能はず、遠く津門に走り、于斯堂查氏に主る。

更に、水西莊に最も長く滞在した汪沆について、師の厲鶚は次のようにいつている。

使西顥得行其志、有適時之用、当不作碌碌人。而年已逾壯、奔走衣食、近又自津門帰里、將為閩嶠之遊。豈天之窮其身、所以昌其詩耶。

『樊榭山房文集』卷三「盤西紀遊集序」
西顥をして其の志を行ふを得、適時の用有らしめば、当に碌碌たる人と作らざるべし。而るに年已に壯を逾え、衣食に奔走し、近ごろ又津門より里に帰り、將に閩嶠の遊を為さんとす。豈に天の其の身を窮せしむるは、其の詩を昌らかにせんとする所以なるか。

水西莊の詩壇の名を世間に知らしめたとされる汪沆も、思う地位に就けず、遊歴を繰り返すしかなかったのである。厲鶚にしても、貧困のため収入を求めて北京に赴いたのが乾隆十三年、結局そのまま水西莊に留まることとなったのは先にみたとおりである。それ以前は揚州馬曰琯のもとに寄食し、豊富な蔵書を用いて『宋詩紀事』編纂の仕事等をしている。各地の詩壇の領袖だったと言われるが、各地を移動して寄食していたとも言えるのである。

る。

では詩社に在る間、客人達はいかにして収入を得たのであろうか。水西莊には直接の資料はないが、馬曰琯の元に身を寄せた全祖望に、それを示唆する資料がある。

十四年己巳、先生四十五……秉純按、先生自辛酉以後極貧、饔飩或至不給、冬仲尚衣衾衣、頼維揚詩社歲上庖廩。
(董秉純「全謝山年譜」)

十四年己巳、先生四十五……秉純按ずるに、先生辛酉より以後極めて貧しく、饔飩或いは給らざるに至り、冬仲も尚ほ衾衣を衣、維揚詩社の歳上庖廩に頼る。

全祖望は「維揚詩社」での「歳上庖廩」つまり年俸のごときものに頼ったとある。詩社がただの唱酬の場ではなく、詩人にある程度の奉酬を支払うことで客人を集めていたことがわかる。

そもそも詩人達が貧困であったのは、官職を得なかったためである。いいかえれば、杭州の詩人たちは、無官の人が多かった。といっても、優秀でなかったわけではない。詩才はもとより、学識にも富んでいたことは、汪沆、杭世駿、符曾、万光泰、劉文煊、趙昱と、多くの詩人が乾隆元年の博学鴻試に推薦されていることが証明している。しかし、結局任官が適わなければ生活を維持することは困難であった。ゆえに招きに応じて各地の詩社

を転々とする事になったと考えられる。

(二) 杭州詩人の名声

詩社が名士を求めたことは、先にみた通りである。ここでは名士という視点から杭州詩人を見てみる。同時代に呉敬梓によつて書かれた『儒林外史』の中には、杭州について書かれた次のような場面がある。

景蘭江道「那是做時文的朋友、雖也認得、不算相与。

不瞞先生說、我們杭城名壇中、倒也沒有他們這一派。却是有些幾箇同調的人、將來到省、可以同先生相会。」

(『儒林外史』第十七回)

景蘭江が言つた、「あれは時文を作る仲間で、知つてはいますが、つきあいはありません。正直にいえば、われら杭州の名士の世界には、あの方達のような一派はおられません。しかし同好の士はいくらかおられますから、そのうち省城につきましたら、ご紹介しましょう。」

景蘭江道「衆位先生所講中進士、是為名、是為利。」

衆人道「是為名。」景蘭江道「可知道趙爺雖不曾中進士、外辺詩選上刻着他的詩幾十處、行遍天下、那箇不曉得有箇趙雪齋先生。只怕比進士享名多着哩。」

(『儒林外史』第十七回)

景蘭江が言つた、「皆様方が話しておられる進士合格というのは、名誉のためですか。利益のためです

か。」皆が言つた、「名誉のためです。」景蘭江は言つた、「趙さんは進士には合格しなかつたが、外では詩選に彼の詩が数十にわたつて選ばれて印刷されて、天下に広まつておりまして、趙雪齋先生といえは、知らぬ人はいないという事はご存じでしょう。進士よりよほど多くの名誉を手におられるではありませんか。」

いづれも非常に有名な場面である。杭州の名士の世界では、詩会で得た地位が高く、科挙合格とはまた違つた意味で名声を得ることができるといふのである。呉敬梓の描写は、デフォルメされたところも多く、そのまま信用はできないが、杭州が唱酬の地であるといふのは、かなり当時の実情に近いであろう。古来西湖の周辺では数限りない唱酬が行われてきたのは周知の事実である。詩社ということばが南宋時代に最初に現れたのは杭州であり、清代にも数多くの詩社の名が残されている。そうした杭州で名声のあつた詩人であることは、やはり一つのステータスだつたと考えられる。

更にこれに先だつて杭州詩社の名を高める事件があつた。『南宋雜事詩』の制作である。『南宋雜事詩』は、南宋の故都である杭州の逸聞を集めて一人が百首ずつを詠じ、更に詩ごとに詳しい注を施したもので、かつてない規模と注の詳細さで世の注目をあびた。これは杭州の詩社の同人であつた詩人沈嘉轍、呉焯、陳芝光、符曾、趙

昱、厲鶚、趙信によつて雍正元年に作られたものであるが、『四庫全書總目提要』卷一百九十に「七人之中、惟曾以薦舉官至戸部郎中、鶚以康熙庚子舉於鄉、余皆終於諸生。（七人の中、惟だ曾 薦を以て官に挙げられて戸部郎中に至り、鶚 康熙庚子を以て郷に挙げらるるのみにして、余は皆諸生に終わる。）」とあるように、ほとんどが無官の身であつた。一地方の無官の詩人群が示した学識の高さは、一気に杭州詩壇への評価に繋がつた。唱酬といういわば遊びの文学のみならず、歴史と考証にも明るい学識ある集団として認知されたのである。その後符曾、趙昱、趙信、厲鶚の四人が博学鴻試に推薦されたのは、この作品の評価による所が大きいだろう。また符曾をはじめ雑事詩に参加した詩人の幾人かは、後に水西荘の客人となつてゐる。やがて厲鶚の弟子である汪沆が、水西荘で『津門雜事詩』を撰したのは、まさに『南宋雜事詩』から学んだ、杭州人ならではの仕事であつたといえよう。

四、唱酬以外の杭州詩人の活動

杭州詩人は唱酬以外にも、天津の文化史に残る仕事を残している。その代表的なものを幾つか見ておく。

(一)『天津府志』、『天津県志』

吳廷華と、汪沆により乾隆四年に天津で刊行された。乾隆二年に府尹程鳳文、県令朱奎揚に要請された吳廷華が水西荘を訪れ、博学鴻試に落選した汪沆とともに水西荘の蔵書を用いて撰したものとされ、総修吳廷華、分修汪沆と

記されている。天津の地方誌でありながら、杭州人二人が主纂となつてゐるのは、杭州詩人の史才を示すものでもある。汪沆は、先にみたように、郷里の同志たちと『浙江通志』『西湖志』を分修しており、『乾隆杭州府志』卷九十四、杭州での地方誌編纂の経験を買われたのである。汪沆はこの後『杭州府志』の主纂も務めてゐる。

(二)『津門雜事詩』

乾隆四年に汪沆が撰し、水西荘で刊刻された。『天津府志』、『県志』編纂と同時に作成されており、地方誌編纂時の資料をもとに作られている。よつて『府志』『県志』の記述が雑事詩に取り入れられてゐるところもある。また査学礼が「吟詠之暇、時為郭外游、凡所見聞、悉以詩伝之（吟詠の暇、時に郭外の游を為し、凡そ見聞する所、悉く詩を以て之を伝ふ）」（査学礼「津門雜事詩序」）と云うように、実際に現地をあるいて様々な情報を取り入れる工夫もしたようだ。詩の形式はまさに『南宋雜事詩』と同じであり、杭州の先輩の仕事を他の地で引き継いだものといえる。吳廷華、鄭江、陳弘謀、杭世駿、査学礼が序を寄せてゐるが、天津の役人たる陳弘謀と水西荘の査学礼以外は、全て杭州人であり、これも天津を詠じた詩でありながら、杭州の影響が強いことをうかがわせる。

(三)『絶妙好詞箋』

南宋周密の『絶妙好詞』に、水西荘の主人、査為仁と客人の厲鶚が共同で箋をつけたもので、水西荘で刊刻された。杭州人である汪沆、陳臯が校勘をしており、客人

である杭州人が担った部分が大きい。

乾隆十三年に始めて水西莊を訪れた厲鶚は、査為仁が箋を作っているのを見る。時に厲鶚自身も箋を作りかけていたため、査為仁箋に自分の箋を付け加える形で作った、と厲鶚は述べている。

津門査君蓮坡、……不独諸人里居出処、十得八九、而詞中之本事、詞外之佚事、以及名篇秀句、零珠碎金、擲拾無遺、俾読者展卷時、恍然如聆其笑語而共其遊歷也。予与蓮坡有同好、向嘗綴拾一二、每自矜擲獲、会以衣食奔走、不克卒業。及来津門、見蓮坡所輯、頗有望洋之歎、并舉以付之、次第増入焉。

『樊榭山房文集』卷四「絶妙好詞箋序」

津門の査君蓮坡、……独^たに諸人の里居出処、十に八九を得るのみならずして、詞中の本事、詞外の佚事、以て及び名篇秀句、零珠碎金、擲拾して遺す無く、読者をして巻を展ぶるの時、恍然として其の笑語を聆^ききて其の遊歴を共にするが如きなり。予蓮坡と同好有り、向に嘗て一二を綴拾し、毎に自ら擲獲を矜^たるも、会^{たま}たま衣食を以て奔走し、克く業を卒^おえず。津門に来たるに及び、蓮坡の輯する所を見、頗る望洋の歎有り、並びに挙げて以て之に付し、次第にこれに増入す。

こうして『絶妙好詞箋』が完成したのが乾隆十四年。

同じ年に厲鶚が水西莊を出、直後に査為仁は病死する。乾隆十五年、査為仁の死後に水西莊で刊行された。南宋の詞とそれに関わる事項を詳細に伝えるものとして、非常に評価が高い。

(四) その他

水西莊では、その蔵書を利用しての県志、府志の編纂の他、各種出版事業も行われた。編輯、刊行されたものには杭州人の序が多い。

以下に査為仁『蔗塘未定稿』と査学礼『銅鼓書堂遺稿』と、それらに附された序及び題詞を以下に挙げる。なお、『蓮坡詩話』から『竹村花塢集』までは、『蔗塘未定稿』『外集』に収録される。

*人名のゴシック体は杭州人。

『蔗塘未定稿』査為仁撰。厲鶚序。

『蓮坡詩話』査為仁撰。杭世駿序。

『游盤日記』査為仁撰。吳廷華、杭世駿序。

『無題詩』査為仁撰。査慎行序。陳卓題辭。

『抱甕集』査為仁撰。符曾序。

『押簾詞』査為仁撰。吳陳琰、汪沆、万光泰、陳卓題詞。

『山游集』査為仁撰。汪沆序。

『竹村花塢集』査為仁撰。万光泰序。

『銅鼓書堂遺稿』査学礼撰。杭世駿序。

このように、水西莊を代表する刊行物に、いずれも杭州人の名が入っている。ここからも、杭州詩人の水西莊に

おける存在感を改めて確認することができる。

まとめ

以上、天津水西荘において、その最盛期を支えたのが杭州詩人達であった事実を明らかにし、その活動内容と彼らの遊歴の理由について考察した。

杭州詩人厲鶚が各地の詩社で活躍したことについては広く知られるところであるが、厲鶚個人の行動としてみるのではなく、杭州という一地方の詩人たちが、集団で地方都市を移動した中での現象としてとらえるべきであることは、以上の考察から明らかである。

杭州は唱酬の伝統を持ち、また優れた詩人を多く抱えていた。しかし彼らは多くが無官の職業文人であった。杭州という一地方に多くの職業文人が集中するという状況は、供給過剰を招き、結果的に彼らは名声はあるものの、生活の困窮に陥らざるを得なかった。

一方新興都市であった天津は、交通の要所として経済的にも発展し、都市化が急速に進んでいたが、詩文や學術の水準はまだ低かった。北京という知識人の集積地に近かったにもかかわらず、文化的に立ち後れた都市だったことは、天津の人びとに文化的に対する潜在的な渴望感を抱かせたことだろう。査為仁の水西荘は、こうした新興地方都市の意識を代表し、杭州詩人達の遊歴の受け入れ先となることで、天津に文化をもたらす一つの場となった。同時に杭州の詩人達にとっては、自分たちの能力

を生かし、また生活を支える基盤を得る新天地となったのである。

しかし、水西荘は査為仁の死去にともなって衰退し、杭州を始めとする地方の詩人達も、バトロンを失って天津を離れざるを得ず、以後天津が唱酬の地としてこれほどの繁栄を見ることはなかった。

水西荘と、客人たる杭州詩人の一連の活動は、一時代の地方都市における文化の流通の実態を知るための、究めて貴重な資料を提供してくれるのである。

注

(1) 杭州詩人が天津以外の地でも詩会の主要な客人となっていたことについては、拙稿「袁枚と杭州詩会」(『中国中世文学研究』第四十九号 二〇〇六年) 参照。

(2) 『天津水西荘研究文録』(天津社会科学院出版社 二〇〇八年)。初出は『天津史志』(一九九二年 第一期)。水西荘に関する劉尚恒氏の論考は『天津水西荘研究文録』に収録されている。

(3) 『沽上題襟集』に関しては、原則として上海図書館蔵『沽上題襟集』八巻本を底本とする。

(4) 袁枚『随園詩話』(巻四・七六)に「本籍海寧、寓居天津」とある。海寧は浙江省杭州府に属する。

(5) 杭世駿『吾尺吾意書詩序』(『道古堂文集』卷十二)に「査蓮坡歿而北無壇坫、馬嶠谷歿而南息風騷。」とある。『道古堂文集』は、大阪府立中之島図書館蔵、乾隆四十一年序刊本を底本とする。

(6)『清史列伝』巻七十一「汪沆」には「乾隆十二年、舉博學鴻詞、報罷。遊天津、客查氏水西莊、南北稱者奉為主臬。」とあり、博學鴻試に推挙された年を乾隆十二年とする。しかし、『民国杭州府志』巻百十一及び『聽雨叢談』巻四「丙辰詞科徵士録」は汪沆が乾隆元年に推挙されたとしており、『清史列伝』の記載は誤りである。

(7)査学礼『銅鼓書堂遺稿』は、大阪府立中之島図書館蔵、乾隆五十七年序刊本を底本とする。

(8)「汪沆、字西顥、浙江錢塘人。舉博學鴻詞、同修府県志、主・氏最久。著津門雜詩百首。」(『光緒重修天津府志』巻四十三)による。

(9)水西莊の詩人達の移動の時期については、主に査学礼『銅鼓書堂遺稿』を参照した。『銅鼓書堂遺稿』は編年詩集であり、水西莊における人の出入りが分かる貴重な資料であるが、あくまでも査学礼を中心とした記録であるため、査為仁と厲鶚の唱酬に関する詩を含まないなど、水西莊研究の資料としては、問題点もある。

(10)当時揚州詩壇にも浙江、とくに杭州詩人が多く滞在していたことが知られており、当時の地方詩壇に杭州詩人が大きく関わっていたことは明らかである。

(11)陳章『孟晋齋集』(『清代詩文集彙編』上海古籍出版社二〇一〇年)には、天津での作は見えない。

(12)査学礼序は、八巻本の『沽上題襟集』にはなく、陳阜以下の四人を収録した四巻本の巻首にある。また査学礼『銅鼓書堂遺稿』巻二十八にも収録される。査学礼序については、上

海図書館蔵の四巻本『沽上題襟集』を底本とする。

(13)『銅鼓書堂遺稿』巻九に「駱馬湖口逢符幼魯農部」とある。

(14)『沽上題襟集』巻三査為仁に「厲太鴻以庚申四月二十一日移居詩四首見寄依韻和答」とある。庚申は乾隆五年。

(15)『道古堂詩集』巻十「翰苑集四」に、「喜査解元為仁汪上舍沆自津門至次符戸部曾韻兼懷陸生宗蔡」がある。

(16)汪沆『槐塘文稿』は国家図書館(台北)所蔵の乾隆五十一年序刊本を底本とする。

(17)「汪子西顥具良史之才、僑寓津門、修輯郡志、纂集之余、為津門雜事詩百首。(汪子西顥 良史の才を具へ、津門に僑寓し、郡志を修輯し、纂集之余、津門雜事詩百首を為る。)(鄭江「津門雜事詩序」とある。

※本論は平成二十三年～二十五年度科学研究費補助研究 基盤研究(C) 23520449「乾隆期杭州詩人集団の活動とその詩風に関する研究」の研究成果の一部である。